

305 子宮体癌における傍大動脈リンパ節(PAN) 転移の危険因子と術後化学療法の有用性に関する検討

国立病院四国がんセンター

千葉 丈, 日浦昌道, 野河孝充, 藤岡 徹,
村上隆浩, 横山 隆,

[目的]子宮体癌におけるPAN郭清は進行期の決定, リンパ行性転移ルートへの遮断, 追加治療を含めた重要な臨床的情報を得ることができる。PAN転移の危険因子, 適応, 術後化学療法の有用性について検討した。[方法]1987年から1994年までに治療した体癌165例のうち, 放射線療法, 内膜に限局した症例を除き, 骨盤(PN)・PAN郭清を施行した100例(Ia-71, Ib-14, II-10, III-4, IV-1)において, 閉経, 腫瘍最大径, 筋層浸潤, 組織型, 脈管侵襲, PN転移, 腹腔洗浄細胞診, CA125値とPAN転移との相関を検討した。術後化学療法はCAP療法を施行し, PAN転移有無の5生率からその有用性を検討した。[結果]PN, PAN転移率は6/100(6%), 7/100(7%), PAN転移のみは4例(4%)で, 筋層浸潤 $\geq 2/3$ -3例, $\leq 1/3$ -1例, かつ右卵巢静脈分枝部近傍に認められた。PAN転移の危険因子の検索は, 閉経の有無では6/64(9%), 1/36(3%), 腫瘍最大径 $\leq 2\text{cm}$, $> 2\text{cm}$ では1/22(5%), 6/78(8%), 脈管侵襲陰性, 陽性群では0/43(0%), 7/57(12%), 筋層浸潤 $\leq 1/3$, $1/3 \sim 2/3$, $\geq 2/3$ は1/50(2%), 0/22(0%), 6/28(21%)であった。PN転移の有無は3/6(50%), 4/94(4%), 腹腔洗浄細胞診陰性, 陽性群は6/88(7%), 1/12(8%), CA125値陰性, 陽性群は3/74(41%), 4/26(15%)を示した。閉経, 筋層浸潤, 脈管侵襲, PN転移に統計学的有意差が認められた($p < 0.01$)。PAN転移症例の組織型は内膜腺癌 G1-1例, G2-2例, 腺扁平上皮癌-2例, 漿液性腺癌-1例, 明細胞腺癌-1例と特殊型が大部分で, PAN転移陰性群, 陽性群の5生率は89%, 67%であった。[結論]PANのみの転移例は卵巢静脈分枝部近傍に認められ, 上記危険因子と組織型を考慮してPAN郭清を決定し, 十分な化学療法により予後改善を得ることができる。

306 子宮体癌手術例における予後因子と術後追加治療の内容からみた予後の比較

兵庫県立成人病センター

山崎正明, 北川勝, 福永次雄, 東田太郎,
西村隆一郎, 大津文子, 長谷川和男

[目的]子宮体癌に対する術後追加治療法を選択するに際して参考となる情報を得ることを目的とした。[方法]対象は1975-94年の間に当科で準広汎あるいは広汎性子宮全摘術および後腹膜リンパ節郭清を行ったpT1b~3cの子宮体癌症例160例で, その内訳は術後照射施行例(R群)66例, 術後照射併用例5例を含む化学療法施行例(C群)36例, 追加治療なし(N群)58例であった。これらの症例について, pTや他の予後因子の内容別にKaplan-Meier法を用いて無再発率曲線を作成し, その予後を比較した。[成績]対象症例全体における追加治療法別の予後の比較では, 各群の5年無再発率はR群73%, C群63%, N群98%で, R群とC群に有意差は認められなかった。pT別のR群とC群の予後の比較では, pT1b~2aでは両群ともに再発例は1例も認められず, pT2b~3cにおいても両群に有意差は認められなかった。再発部位の比較では, R群では骨盤内5例, 遠隔転移14例, C群ではそれぞれ2例, 7例と両群の再発部位の分布に差は認められなかった。さらに再発例の内容を詳しく検討すると, C群では9例中8例がpT3の症例で, 他の1例もpT2bではあるが子宮全体がほとんど癌病巣に占拠されハイリスクと考えられた症例であった。一方, R群では19例中12例がpT3c, 7例がpT2bであり, pT2bの7例中6例は筋層浸潤や脈管侵襲など他の予後因子を有する症例であったが, 1例は軽度の頸部浸潤しか認められない症例であった。[結論]現時点では術後照射例と化学療法例の治療成績に明らかな差は認められず, 複数の予後因子を有しハイリスクと考えられる症例に対しては両者を組み合わせたより強力な術後追加治療が必要であると思われた。